## 8) 外傷性大動脈損傷の1治験例

恭伸•後藤 橋本 倉岡 節夫・大関

重孝 (立川総合病院) 勲 (心臓血圧センター) 宏・春谷 敬夫·坂下 入沢

症例は23歳男性、バイク乗車中、乗用車と衝突して受 傷、緊急入院した、前胸部に打撲傷と左上腕骨折、右膝 関節靱帯損傷あり、胸部X線で左胸水貯留と縦隔陰影の 拡大を認めた、胸部 CT 検査で下行大動脈に動脈解離 の所見を認めたが、血行動態的に安定で瘤形成の所見が なかったので胸腔ドレナージで経過観察とした。しかし 第14病日に行った大動脈造影で下行大動脈に瘤形成を認 めたため、受傷後20日目に手術を行った、左開胸でアプ ローチし補助手段としてアンスロンチューブによる上行 大動脈-左外腸骨動脈間の一次的バイパスを使用、下行 大動脈に半周にわたる内膜離断あり仮性動脈瘤を形成し ており、瘤切除し人工血管移植術を行った. 術後、合併 症なく経過は順調で、現在下肢リハビリのため入院中で ある.

## 9) 肺癌術後 ARDS 症例の検討

滝沢 恒世・小池 輝明 (県立がんセンター 新潟病院胸部外科 寺島 雅範

1988.1 月から1991.3 月までの肺癌切除 365 例中、 5 例に術後 ARDS が発生した. 年齢は62歳から74歳, 全 例男性で, 術式は右上葉切除1例, 右中葉切除1例右下 葉切除2例,右肺摘除1例であった.術後3日目から9 日目までに呼吸困難となり、胸部X線写真で両側肺野に 粒状影出現し、人工呼吸器を装着、抗生剤、メチルプレ ドニゾロン、ウリナスタチンを投与したが、12日目から 39日目までに全例死亡した. 肺癌術後 ARDS 症例の特 徴は 1) 術後早期に発症, 2) 白血球増加無し, 3) 痰培 養で起炎菌不明、4) 抗生剤無効、5) メチルプレドニゾ ロン有効、6) 予後不良であった。

10) 腹部大動脈瘤手術における到達法の検討 ―後腹膜経路の功罪-

> (長岡日赤胸部心臓) 血管外科 矢澤 正知·富樫 賢-佐藤 良智

当科で経験した腹部大動脈瘤で非破裂性のものは36例 で、後腹膜経路での手術は14例であった. 正中切開法で 術後のイレウスを経験してから後腹膜経路で手術を行っ

ている. 後腹膜経路による手術は術後の経口摂取までの 時間が短縮され、消化器症状を訴える頻度が少ない方法 である. 後腹膜経路でも腹横筋を切開する方法と腹直筋 を分ける方法があるが疼痛や解剖学的に上腹部が弱いな どの欠点が指摘されている. 今回後腹膜経路で手術を施 行し、創哆開をきたした症例を経験し、後腹膜経路によ る手術法につき検討した.

11) 長期ステロイド投与を受けていた 2 症例の 弁置換術の経験

平塚 雅英•岡崎

中山

健司・土田 昌一 純一・江口 昭治(新潟大学第二外科) 林 ステロイド投与中の膠原病に合併した大動脈弁病変に 対し、大動脈弁置換術を施行した2例を経験した.

症例1は、46歳女性、SLE のため18年間プレドニン を服用していたが、大動脈弁輪拡張症兼大動脈弁閉鎖不 全症と診断され、平成3年6月13日当科で Cabrol 手 術を施行した、術後経過は良好であった.

症例2は、46歳男性.ベーチェット病の診断を受けて いたが、心不全症状が出現し大動脈弁閉鎖不全症と診断 された. ステロイド投与により炎症の鎮静化をはかり平 成3年7月3日スカート付き代用弁を用いた大動脈弁置 換術を施行し、術後経過は良好であった.

ステロイド投与中の開心術は、易感染性、組織の脆弱 化などの問題があり、これらを考慮した患者管理が必要 である。

## 12) CABG+MVR 手術

―同時および2期的手術の3例―

山崎 芳彦・桜井 淑史 (新潟市民病院) 青木英一郎・吉谷 克雄 (第二外科

我々は、最近の2年半で3例の CABG+MVR の同 時または2期的手術を経験したので報告する.

症例1:57歳男性、2年前、3枝病変で2枝バイパス 手術を受けた、術後心不全のため補助循環を行なったが 回復. その後 MR が出現し、次第に増強した. EF 29 %, カテコラミン, IABP を術前に要した. M-H 弁 29 で弁置換,後尖は温存した. 術後2年3カ月になるが, 元気である. 症例 2:73歳男. PTCA 後冠動脈再狭窄 と MR Ⅲ度があり、#7の CABG と MAP を行ない、 MR は軽減していた. 1年後 MR が再度増強し, 心不